

## 北米調査報告

### 戦後北米の日系アメリカ人の経験

東京外国語大学国際日本研究センター

友常勉

はじめに

科研〈紐帯としての日本語〉の北米日系人調査のパートでは、ロサンゼルス日系アメリカ人三世のヒアリングと、近年のアメリカ西海岸の大学アカデミズムにおける日系アメリカ人・アジア系アメリカ人研究のリサーチを中心におこなった。

日系三世の使用言語は英語であり、意識的に学ぶことなくして日本語を話すことはない。ただし、日本との関係や二世との世代の〈つながり＝紐帯〉として日本語あるいは日本ルーツの文化的アイデンティティが姿を現すことがある。それゆえこのパートではおのずと「紐帯としての〈日本〉の検討」が課題となった。そこでは、①日本由来の宗教（仏教）や県人会組織を通じて再生産されている伝統文化（民謡など）をよりどころとした文化的紐帯を維持する立場、②1960年代の公民権運動や学生運動を経験し、日系人としてよりはアジア系アメリカ人としてのアイデンティティを選択していく立場の両極が存在する。すなわち移民の送り出し元のエスニック・アイデンティティの保守か、ホスト社会のなかでの適応（そして「同化」）かという両極である。日系アメリカ人社会では②の立場が主流であり、①の立場は②の立場に対して補完的な関係にある。両者はときに対立的である。それは20世紀前半の北米移民史のなかの記憶、戦時期の強制収容、そして60-70年代の公民権運動の時代をどう経験したかにかかわっている。それが後述する「リドレス」の評価にもかかわっている。そうした世代差を自覚しながら、現在の日系アメリカ人たちは、アジア系アメリカ人としての政治的文化的現在を共有している。ただしこうしたアイデンティティ・ポリティクスと並行して、市場価値に基づいて、あるいはエスニック・アイデンティティを意識して、第二言語として日本語を「選びなお」し、子どもたちに日本語を習得させようとする日系人たちも少なくない。

アメリカ西海岸の大学アカデミズムには、移民研究の手法にもとづく日系移民研究・移民労働史研究の分厚い蓄積がある。そして、日米戦争中に強制立ち退き・強制収容された日本人移民・日系アメリカ人に対する各2万ドルの補償を含む、1988年のレーガン政権のもとでの「市民の自由法」署名という「リドレス」（公的な謝罪）が、研究においても重要な契機をなした。この「リドレス」にともない、新しい「全米日系人博物館」が建設され（1992年）、研究・大学機関における強制収容経験についての膨大なオーラル・ヒストリーのアーカイヴ化が実現した。アジア研究の有力な一部を構成する日系アメリカ人研究は、現在、ダイアン・フジノ（カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校）による60年代70

年代における公民権運動や反人種差別闘争を担った日系人活動家たちのライフ・ヒストリーの刊行にみられるように、高等教育を受けた三世たちに焦点をあてている。それは「アジア系アメリカ人」としての社会的要請にシフトしていく日系アメリカ人たちの歴史過程に対応しているといってもいい。

以上のようなことから、本調査の課題は、日系アメリカ人のエスニック・アイデンティティの推移をふまえながら、「紐帯としての〈日本〉」の契機を確認し、その意味を検討することとなった。

## 1 調査研究の前提

「はじめに」で記したように、北米の日系アメリカ人研究は、分厚い移民研究史とエスニック・アイデンティティの研究を資源として、19世紀末から20世紀初頭のハワイ・中南米プランテーション、強制収容、戦後公民権運動とラディカルたちの経験のライフ・ヒストリーを蓄積している。そのもとで、それまでの二世・三世に同質性を設定してきた研究に対して、日系アメリカ人たちのアメリカ社会への同化の進展とともに、そこに一元化できない多様な政治戦略や対立に注目する研究が生まれている<sup>9</sup>。

同様に特筆されるのは、こうした傾向を加速させている強制収容経験と60-70年代のラディカリズムについてのライフ・ヒストリー研究の広がりである。すなわち、長年にわたる公民権運動とブラック・パンサーとの共闘で知られ、著名な活動家であるユリ・コチヤマの研究。昨年、FBIのインフォーマントではなかったかという“ルポ”によって政治的に焦点化した、ブラック・パンサーの非黒人メンバーとして知られてきたリチャード・アオキの研究<sup>10</sup>。さらに強制収容経験をバネに公民権運動を担った多くの日系アメリカ人活動家たちの研究<sup>11</sup>。とりわけ60年代ラディカリズムのアイコンの一人であったリチャード・ア

---

<sup>9</sup> 管見のかぎりでは Jere Takahashi, *Nisei /Sansei : Shifting Japanese American Identities and Politics* [Temple University Press 1997]、Lon Kurashige, *Japanese American Celebration and Conflict: A History of Ethnic Identity and Festival in Los Angeles, 1934-1990* [University of California Press 2002]、さらに日系アメリカ人を含めた、最近のアジア系アメリカ人の政治選択について、統計資料を用いた分析として Janell Wong, S. Karthick Ramakrishnan, Taeku Lee, And Jane Junn, *Asian American Political Participation: Emerging Constituents and Their Political Identities* [Russell Sage Foundation 2011]。

<sup>10</sup> これについてはダイアン・フジノの一連の仕事が参考になる。Diane C. Fujino, *Heartbeat of Struggle: The Revolutionary Life of Yuri Kochiyama* [University of Minnesota Press 2005]、*Samurai Among Panthers: Richard Aoki on Race, Resistance, And Paradoxical Life* [University of Minnesota Press 2012]。セス・ローゼンフィールドによるリチャード・アオキの「FBIスパイ」説とそれに対する反論を含めた分析については、*Amerasia Journal* vol.39-2[2013]の特集が参考になる。

<sup>11</sup> 後述する二世プロGRESSIVとの関係から、ここでは Diana Meyers Bahr, *The*

オキについてのダイアン・フジノの評伝は、屈折したアイデンティティと愛国的ミリタリズムへの傾斜、そして反人種主義の思想などの複合として日系三世を描いた点で重要である。

#### 本調査の成果

こうした研究動向に対して本調査がおこなったのは次の三つのテーマである。①これまで限られたリソース・研究しか存在しなかった 1950 年代の二世プログレッシヴ[Nisei Progressives]の活動。これは従来の日系移民史研究・日系移民の公民権運動の空白を埋める作業として位置づけられる。②日本文化と日系三世たち。ここでは宗教活動を紐帯とした日系移民社会の結合の形態、および県人会組織と民謡大会を介した日系社会の結合形態の調査。また、日系家族と日本語教育とのつながりを知るために、ロスアンゼルス日本語学校においても調査をおこなった。③日系アメリカ人とアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの差異と共存の在り方についての調査。

## 2 二世プログレッシヴ

二世プログレッシヴは 1948 年ヘンリー・ウォレス大統領選挙のための党 **Progressive Party** の日系組織として **Sakae Ishihara** を中心に結成された左翼組織である。メンバーの特徴は戦前に存在した二世プログレッシヴより一回り以上若い世代で、大学教育を受け、強制収容所・二世部隊への従軍経験（**S. Ishihara** は **MIS** に従軍）がある。大学教員、専門技術者、自営業者、ディズニーのアニメーターを含めた映画関係者など、二世の文化的経済的上層が中心であった。また白人の左翼知識人やハリウッド関係者のサポーターも存在した。二世プログレッシヴはウォレス選挙後、1949 年に活動の継続をめざして綱領を策定する。それは、「一般綱領：日系の問題は全移民・全人民の問題と宣言、親 Kommunismus」であり、「個別綱領：強制疎開・強制収容への補償、コミュニティ防衛」であった。1952 年には全米で日本人民版画展を開催し、日本人の左翼芸術家との連帯運動をすすめている。こうして 1952 年移民および国籍法（**McCarran-Walter Act 1952**：移民の分類・移民数の制限と共産主義運動・政治活動関係者の国外追放条項などを含む）に対する抗議行動や、「一般綱領」にもとづく国際平和運動の推進、文化運動戦術を展開した。

総じて反人種主義闘争と階級闘争の連結、愛国的政治的前衛としての **Progressive-ness** の形成をめざしている。それは強制収容世代の経験から出発した、第二次大戦後の日系アメリカ人の文化的感情的ルーツに依拠した運動であったとみなすことができる。そしてそこに日系アメリカ人としてのアイデンティティの表出があったといえよう。なお資料として図 1 二世プログレッシヴ略史 [figure.1 Brief history of Nisei Progressives]と図 2 二世プログレッシヴの主なメンバー表 [figure. 2 Leading persons’

---

*Unquiete Nisei: An Oral History of the Life of Sue Kunitomi Embrey* [Palgrave Macmillan 2007]をあげておく。

list of Nisei Progressives]を添付しておく。

**figure.1 Brief history of Nisei Progressives**

	NP activities	historical issues
1947	For Henry Wallace presidential election, first meeting at Sake Ishinara's house in LA. NY Nisei Progressives formed. Take a census of African American in Little Tokyo	racially offensive remark made by NY mayor LaGuardia and visit of Caucasian Progressives to JACD
1948	Presidential election. Ishihara went to N.Y. for Iva Toguri (Tokyo Rose). Iiyama moved to Chicago (40-50 NP numbered, core was 20)	
1949	NY NP member attended Paul Robeson concert (African American singer, civil rights and progressive activist) and was attacked by White Americans. Sakae Ishihara organized a conference for new NP シビックセンターとLA市警ビル建設計画によるリトル・トーキョー移転計画 (The Independent 1949)	
1950		
1951		
1952	日本人民版画展(全米 70 カ所で開催)	

figure.2 Leading persons' list of Nisei Progressives

name	1949 committee	branch	birth year	parents' origin	profession	activity	trajectory after NP	Ref.
Ishihara, Sakae	*	LA, NY	1921	Hiroshima	服装店経営	leading parson		RS1997.12.11
Kunitomi, Embry, Sue	*	LA	1923	Okayama, Hawaii				Unquiet Nisei
Ishihara, Okanishi, Fumiko	*	LA				treasure		RS
Ishii, Chris	*	LA	1919		Disney animator, editor of Crossroads	, attended Disney workers strike in 1941, layout and illustrations for The Independent		RS
Takei, Arthur (Art)	*	LA						RS
Sato, Wilbur	*	LA	1929			UCLA student, union member of sheet metal making factory	attorney and active Democrat during 1960s	RS
Sanbonmatsu, "Ike", Akira		NY	1929		communications instructor of Suny Brokport, charter member of AFL-CIO	organizing efforts of labor union during 1930s	SUNY	RS
Iiyama, Chizu		NY, Chicago	1911			Japanese American Committee for Democracy, Chicago Resettlers Committee, core of NY NP		RS
Iiyama, Ernest		NY, Chicago				JACD member, core of NY NP		RS
Matsuda, Kimi		NY				grew up in Hawaii and witnessed Makawell Sugarcane Plantation labors, called to testify Hawaii Seven trial in 1951	Hawaii Youth Correctional Facility	RS
Matsuda, Don		Chicago						RS
Hiratzka Mizuno, Amy		NY	1922					RS
Kitano, Mary								RS
Kano, Richard								RS
Tsujimoto, Mitzi								RS
Tsujimoto, Richard								RS
Komuro, Tom	*				editor of Crossroads			RS
Aoki, Helen		LA						RS
Saijo, Albert			1926					RS
Saijo Gompers								RS
Hata, Bill	*	LA						RS
Ishioka, Mae	*	LA						RS
Kanno, Frank	*	LA						RS

RS=Rafu Shimpo 1997/12/11

Unquiet Nisei= Diana Meyers Bahr, *Unquiet Nisei: An Oral History of the Life of Sue Kunitomi Embrey* (New York: Palgrave Macmillan.2007)

〈収集資料・学会報告・論文など〉

これにかかわって以下の資料を収集した。

Rafu Shimpo 1997年12月11日号（サカエ・イシハラはじめ主要メンバーのインタビューを特集している）

Nisei Progressives 関係（Southern California Library=南カリフォルニア公立図書館所蔵資料）

--Leaflet of January 18, 1949

--Proposed Platform of the Nisei Progressives as Drafted by the Platform Committee and Presented to the Founding Conference for Consideration and Adoption

--Proposed Constitution and By-laws of the Nisei Progressives as Drafted by the Constitution Committee and Presented to the Founding Conference for consideration and Adoption

この調査はカルチュラル・スタディーズ学会年次大会・カルタイ広島大会（於・広島女学院大学）において、「二世プログレッシヴ」：戦後北米における日系左翼の思想 Nisei Progressives : Japanese American left during the Postwar Period in the United States」として口頭報告をおこなった（2012年7月15日）。

### 3 「日本文化」と日系三世たち、日本語学校

#### 3-1 宗教

日系アメリカ人における世代間の紐帯としての〈日本〉を検討する目的から、ロサンゼルス・リトル・トーキョー内にある東本願寺・西本願寺の開教師および信徒たちのヒアリングをおこなった。[2011/08/11, 2012/03/16-18]

〈調査研究上の前提〉

この分野でもすでに分厚い研究蓄積がある。そもそもアメリカ社会では日曜礼拝が市民の義務とみなされる。そのため日系移民にとって教会は必須であった。そうした中で浄土真宗には、日系移民の出自が西日本に集中していることから、日系社会内部で強い社会的要請があった。

先行研究および北米における浄土真宗教団の布教活動については脚注を参照のこと<sup>12</sup>。

---

<sup>12</sup> Yanagawa, Keiichi, ed. *Japanese Religions in California: A Report on Research within and without the Japanese-American Community*. Tokyo: Dept. of Religious Studies, University of Tokyo 1983

Charles Prebish and Kenneth Tanaka, eds. *The Faces of Buddhism in America*. Berkeley: University of California Press 1998

*Shinran and America: Problems and Future of Propagation in America*. Institute for the

〈本調査の成果〉

1)東本願寺では以下のインタビューをおこなった。

① M・Nさん（女性、1972生）富山県出身、開教使

大学院（静岡県立大）の修士論文執筆（日系人社会における真宗の役割）のため留学し、その後、開教師となった。

（使用言語は日本語）

② R・S（男性、1950年生、三世）会社役員

③ D・I（男性、1951年生、三世）大学職員

（いずれも使用言語は英語）

2)西本願寺

①B・W（男性、1950年生、アフリカ系アメリカ人）開教使

東本願寺・開教師・Mさんのお連れ合いで日本語は話せない。

・60年代にサンフランシスコで高校生活を送り、60年代後半の学生運動の過程で、生物学徒であったが仏教研究に転身。

② A・K（男性、1972年生、三世）大学職員

③ J・K（女性、1956年生、三世）

④ H・K（男性、1944年生、三世）歯科技師

⑤ S・K（女性、1968年生、二世）

（いずれも使用言語は英語）

東本願寺の開教師であるM・N氏によれば、真宗には、翻訳できない用語として、信心・凡夫・本願・阿弥陀などがあり、それが宗教的紐帯としての役割を果たしている。また、東本願寺は二世を中心に建立され、現在も門徒の中心は二世である。毎水曜日に日本語の講座、歎異抄の勉強会しており、これも二世が中心である。ただしインタビューをおこなった二人の日系男性は三世であり、三世も活動の中心になっていることがうかがえる（もともとこれは三世のインタビューをこちらが希望したからでもある）。

この点は、西本願寺の開教師であるB・Wの言葉からも裏付けられる。西本願寺の現在の活動の中心は三世世代である。インタビューした4人の日系男女の共通点として西海岸の大学を卒業し、大学関係、専門職関係についていることがあげられる。

---

Study of Buddhist Cultures, Ryukoku University, ed. Kyoto: Institute for the Study of Buddhist Cultures, Ryukoku University 1996

Duncan Williams and Christopher Queen, ed. *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*. London: Curzon Press, 2002

*Engaged Pure Land Buddhism: Challenges Facing Shinshû in the Contemporary World--Essays in Honor of Professor Alfred Bloom*. Berkeley: Wisdom Ocean Publ. 1994

日系アメリカ人であることを意識した契機として、R・S氏は、高校時代に差別経験があったことを泣きながら語られた。

6人の日系男女の家庭内では日本語は使用しない。ただし子どもたちに日本語を学ばせている家庭もある。教団への参加は「仲間をもとめて」である。西本願寺の場合には、開教師のB・W氏との真宗の勉強会が楽しいとのことであった。これはみんなでワインを飲み、ピザをとっての法談＝放談である。ここにはB・W氏のラディカルな真宗解釈もあざかっている。彼はアメリカのコンテクストで浄土真宗を伝えることに貢献したいと考えている。新旧の教えをどう区別しているかについていうと、伝統儀礼については、浄土真宗としての儀礼性を重んじる。同時に社会問題に対して開かれた教義を説く。実際、同性愛や若者の関心などを柔軟に説教にとり入れている。それゆえ葬式仏教としての日本の仏教には懐疑的である（曹洞宗、高野山、浄土宗、日蓮宗などに対して）。そうした説教にたいして、二世は保守的な態度をしめすが、三世は肯定的である。

以上のことから、日系アメリカ人たちが教団を必要とするのは、日系アメリカ人としてのエスニック・アイデンティティの共通性と、先にM・N氏が語っていたような、翻訳不可能な信仰の言説を介した宗教的紐帯にあるといえよう。そしてそうした関係性を維持しつつ、アメリカ社会と共存するための工夫を開教師たちはおこなっている。

その他のトピックとして、2011年お盆のお祭りで西本願寺の門徒・宮本信子さん作詞のMottainai（「もったいない」）が披露された。これは2011年3月11日の震災・原発事故以後の日本社会の動向に触発されたもの。英語の歌詞だが「もったいない」だけ日本語で歌われる。

なお収集資料は以下のとおりである。

*2011 Bon Odori Dances*(DVD, Mottainai 収録)

*The Collected Works of Shinran volume1,2*

*Higashi Honganji Buddhist Temple, Los Angeles Betsuin: Centennial Celebration*  
1904・2004

*Honpa Honganji Los Angeles Betsuin* 本派本願寺羅府別院 1905・1980

*Memories: The Buddhist Church Experience in The Camps, 1942-1945*, Second edition

その他、B・W師の論文（Betsuin Jihoに掲載されたもの、十数編）

### 3-2 県人会の活動

ここでは日系アメリカ人の文化的紐帯という観点から、県人会組織を中心に開催されている民謡協会大会を調査し、その中心人物N氏へのヒアリングをおこなった。[2013/3/25]

① N（男性、1936年生） 帰米二世 庭園業

（使用言語は日本語）

帰米二世としてのN氏はアメリカで生まれ、いったん日本に帰り、21歳でアメリカにもどった。鹿児島県人会に所属し、民謡協会の長い活動歴がある。日本で鹿児島商科大学を

卒業した N 氏は大学時代からバンドにかかわっていたが、バンド活動をはじめたのはアメリカ社会に来て徴兵を終えた後の 29 歳になってから。徴兵時代はフォート・ベニングで、ベトナム戦争に向けたゲリラ戦のための訓練にたずさわった。バンドでは司会から始め、佐藤松豊さんに師事して民謡を学んだ（なおロス出身で鹿児島育ちの歌手の AI の家族も松豊会に所属している）。日系社会における民謡協会の意味は、それぞれの流派が集まることのできる場所だということである。踊りの流派もいくつかあるが、民謡はより参加しやすく、まとまりやすい。沖縄県人会にも 20 ぐらいのグループがある。民謡協会は毎年 2 回集まり、さらに西本願寺で紅白歌合戦も行っている。民謡が紐帯となるのは、「変えない」こと、「日本でやっている通りにすること」が重要だからである。紅白歌合戦もその演目や構成を変えない。形式を変えないことによって多様な出自の日系人がかかわれる。民謡協会大会でも、踊りでは日系人だけでなく中国系アメリカ人の若者たちも参加しているが、日本語で歌う民謡は日系人が参加しやすい。ほかのエスニック集団が参加すると上手か下手かという基準が生まれてしまう。日本からゲストを呼ぶときも（美空ひばりや北島三郎を呼んだことがある）、チケットを買うのは日系人である。こうして日系というエスニックな境界を柔らかく保持することによって、競争のない関係を不断に維持するという効果が期待されているといっていだらう。なお N 氏の子どもたちについていえば、娘は奨学金を取って民謡を学んだことがあるが、日本語のハンディがある。継承文化からみたときの困難はある。

収集資料は以下のとおりである。

南加鹿児島県人会『創立百周年記念祝賀会』（June 6<sup>th</sup>, 1999）

*Japanese Prefectural Association of Southern California 35 th Anniversary (Nov.1999)*

（南加県人協議会創立 35 周年記念）

南加鹿児島県人会創立百十周年 同婦人会創立百周年記念誌（2009）

南加鹿児島県人史創立百周年記念（1999）

（南加鹿児島県人会は南カリフォルニア最大の県人会組織）

### 3-3 日本語学校での調査：日本語学園協働システム・田中雅美学園長[2013/3/26]

同校は南カリフォルニア州で第二言語として日本語を教授する学校として知られている。1911 年にロスアンゼルス第一学園として出発したこの学校は、日本人倶楽部から出版した。初代園長は留学生であった島田好平氏（戦中に強制収容所で死去）。現在の学校数は 5 校、生徒数は 300 人。毎週土曜日に開講。月額は 65 ドル／一人。教員は 34～5 人。カリキュラムは小中高成人で分かれる。小の部が 200 人（全体の 75%）。25%が家庭でも日本語を話す日系人の子弟、25%がアメリカ人で日本文化に親しんでいる家族の子弟、残りの半数が日系人だが家庭で日本語を話せないの、継承言語として学ばせたいという家族。日系の家族が日本語学校に子弟を学ばせる理由は、バイリンガルとして育ててきた自分たちの経

験を踏まえて、そうした言語能力をつけさせたいと考えていること。ただしある調査にもとづけば、8割ぐらいは「無理やり」連れてこられ、10代になって自主的に学ぼうとするようになるという。テキストについていうと統一した教材はない（かつては文部省の作成したテキストを使用していた）。日本語スピーチコンテストも毎年開いている。学園として定まった日本語教授法はない。それは、そうした教材・教育法をつくっても「帯に短し襷に長し」だからではないかと田中氏は感じている。むしろ、日本に来る外国人に日本・日本語を教えるテキストが段階的で一番いいように感じるとのことである。そうしたテキストをそれぞれの先生が工夫しながら使っている試験的な段階である。

近年、日本の大学は海外からの入学者のための門戸を開こうとしている。依然として日本の大学に合格しても、北米の大学に合格したら、北米のほうを選ぶ場合が多い。とはいえ日本人・日系人の親たちは子どもたちにバイリンガルであることを期待している。そうした経済的なメリットがある。しかしそれ以上の意味があるのではないかと田中学園長は感じている。それは「日本文化」へのあこがれではないかと話された。そうしたニーズは常にあると感じているとのことであった。

#### 4 アジア系アメリカ人としての現在

日系アメリカ人としてのアイデンティティとアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの相違、相互の葛藤の検討のために、人権問題など共通の政治活動にかかわることでつながっている二人からヒアリングをした。[2013/09/11-13]

① M・N（男性、1936年生、三世）著名なアクティヴィスト。

60年代後半にUCLAのAsian American Allianceの学生によって創刊されたニューズペーパーGidra[1969-1974]の寄稿者でもあった。

② S・M（女性、1949年生、三世）メンタル・スクールのセラピスト。

UCサンタバーバラ校時代からアジア系アメリカ人のコミュニティで活動し、現在も受刑者の社会復帰、政治犯救援運動などにたずさわる。

（いずれも使用言語は英語）

著名なアクティヴィストであるM・N氏の父は、シアトルで育ち木こり[lumberjack]となり、そこで九州を出自にする家の出である女性(Mの母)と結婚しロサンゼルスにきた。大戦中はサンタ・アニタに収容され、そこで日系人たちの暴動を目撃している。戦後は徴兵され、そのあと公民権運動やブラック・パンサーの運動と出会い、日系社会で政治活動を始めた（なおこれらの家族背景についてはYushi Yamazaki氏から提供いただいたInterview by Laura Pulido on May 7<sup>th</sup>, 2000、にもとづく）。70年代には日本を訪れ、広島や三里塚闘争の活動家たちとも交流している。その後も数回日本を訪問している。共産主義者であり政治活動家としてのM・N氏は、エスニック・ナショナルな立場からアイデンティティを語るのではないが、日本や日系の歴史から「民族と階級」という問題にこだわっている。そしてその立場から「リドレス」に対しても批判的である。

M・N氏に対して、S・M氏のアイデンティティはアジア系アメリカ人であることに置かれている。その帰属意識についてインタビューで次のように語っている。

「1966年に大学に入学したころ、アジア系学生はまだ少なかった。黒人学生といっしょにアジア系学生のコミュニティができあがった。制度的な人種差別があり、教育プログラムにとりくんだ。1967 - 68年のころは、インターナショナルハウスで国際学生との関係のほうに居心地はよかった。大学でマイノリティとしてのカルチャーショックを得た。私たちは大学にいった最初の世代で不利なバックグラウンドをかかえていた。日系アメリカ人はほかの移民とは異なり、同化傾向が強かった。強制収容所を経験し、二世たちは世俗的で、三世はほかの選択肢がなく。どうやって闘うか、サポートがなかった。

しかし同時にベトナムや公民権運動にめざめはじめた。同時期にドラッグ中毒が日系コミュニティでひろがっていた。16歳の少年がで心臓発作で亡くなって事件になった。なぜ若者たちが疎外されているのか。ドラッグに手を出すのか。日本人は恥だと思って公に議論しなかった。日本文化は内省的で率直ではない。サンタバーバラの学生たちはそうした問題にとりくんでアジア系アメリカ人の研究をはじめた。私たちはアジア系アメリカ人の研究コースをもとめた。すべてのステレオタイプと闘うような闘争。黒人研究やチカーノ研究があってもアジア系アメリカ研究はなかった。

日系アメリカ人教員は私たちに反対した。社会学の教授。学部のサポートがなかったのので、私たちが自分でつくらなければならなかった。本も先行研究もなく。強制収容所に関するいくつかの本があっただけ。

その後、1969年からはじまったキューバ革命との交流プログラムに参加。キューバで三ヶ月暮らし、さとうきび労働に従事。フロリダのキューバ人コミュニティ。社会主義とはどんなものかを知る目的もあった。キューバの日系人を介して沖縄にも関心が向くようになった。私の名前からしても父親は沖縄系。それを父にキューバから帰ってから聞いた。

1970年にはキューバはソ連に支援されていたけれど、2001年には観光化されていた。でもその精神は生きていた。まだカストロと社会を信じていた。ある日系キューバ人の女性は親戚がカリフォルニアにいて。でもその女性にとってはキューバがどんなに大変でも故郷だと。その精神は商品化されていない。私たちはアメリカの政府を信じていないけれど。

1965年の移民法改正のあとアジア系はたくさんきた。移民はコミュニティを強くするが日系はちがう。中国系もフィリピーノも新しい文化がはいつてきて、アジア系コミュニティも変化している。多様化している。日系コミュニティとは？孫はイタリア系だし、夫は中国系アイルランド人。

アジア系コミュニティの 이슈では、メンタルヘルスという課題が大変だと思う。主流も傍流もどちらのコミュニティでも同じだけど、ドラッグ中毒がひろがっている。日系アメリカ人は同じ問題をアメリカ人とかかえている。日本に行くと居心地がいいけれど、何かが違うと思う。メンタルヘルスについては、日系ではスティグマになる。多くの抑圧がある。日系アメリカ人家族はしばしばストイックだけど、この社会はそうじゃない。そ

れで精神障害になるひともいる。R・N（日系の受刑者）は殺人を犯して 35 年刑務所にいるけれど、彼は変わろうとしている。彼の事件は産獄複合体のケースともいえる。彼は政治犯なのよ。刑務所で何が起きているかはとても重要。カリフォルニア州にはたくさんの刑務所がある。45 パーセントの囚人はドラッグ中毒。アジア系アメリカ人コミュニティでは、自分たちを代表できない集団もいる。太平洋の諸島の出身者など」。

S・M 氏の場合には、主に 1960 年代の政治的経験からアジア系アメリカ人としてのアイデンティティを不断に「選びなおしている」といっていいのではないだろうか。その際に日本・日本語とのつながりが参照され、それはあくまでアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの一部だということが確認されている。いいかえれば、日本・日本語はそうしたアイデンティティを「選びなおす」ときの媒介、時に否定的な媒介となっているといえる。

なお、S・M 氏の現在の活動であるドラッグ中毒者へのケアというテーマに付随して、ロサンゼルス最大のスラムであるスキッド・ロウ[Skid Row]のホームレスの日本人（男性、1945 年生）の聞き取り調査も並行しておこなった。[2013/09/11]これについては以下の短文で紹介した。

『磯江通信』第 16 号（2014/02/20 発行）